記念講演

石田衣良さんによる記念講演

「それでもやっぱり小説は面白い！僕が好きなとっておきの本について語ろう」

今年の記念講演は『池袋ウエストゲートパーク』シリーズなどで知られる作家の石田衣良さん。ご自身の創作活動や、本というメディアへ寄せる思いについて、たっぷりと語っていただきました。講演の司会は、編集者で石田さんの担当を長く務められている講談社の今井秀美さんにお願いしました。

石田さんはまず「図書館にはお世話になっている」と、図書館への思い入れを語ってくださいました。少年時代の夏休みには、１日に２回も地元の図書館へ通っていたというほど。そんな本漬けの日々の中で、ふと小説家になりたいという夢が芽生えたといいます。

本の世界の中にいると「一人ぼっちではないと思える」という石田さん。読書を通して、娯楽や教養以上のもの得ることができるというご意見がとても印象的でした。

一方で「本の世界は縮小している」という見解も。インターネットをはじめ、信頼性の劣る情報が氾濫する現状を、小説家として心配しているそうです。そんな中で本好きの人々に対しては「少数派で集まって楽しめばいい」と、前向きな（？）エールを送っていました。

その後は今井さんとの対談形式で、本や創作をめぐる石田さんの持論が展開されました。

Q. 石田さんおすすめのシリーズ小説で『池袋ウエストゲートパーク』の原型にもなった作品とは？

A. 池波正太郎さんのシリーズ『鬼平犯科帳』『剣客商売』『梅安』。文章がなめらかでうまい。奇をてらったうまさではなく、例えばおいしいお蕎麦のような。ただし「おいし過ぎない」ところが素晴らしい。『池袋』シリーズでもその点は随分考えました。

いいキャラクターと新しいネタ、そしておいし過ぎないこと。『池袋』シリーズではそこに、アメリカの犯罪小説（アンドリュー・ヴァクスの『バーク』シリーズ）風の文体を取り入れています。

Q. 池波さんの作品は描写力が優れていますが、創作では描写について意識している？

A. 自分の感覚を文章に入れると描写力は上がります。それは会話でも同じ。温度や天気など、相手が想像するための手がかりを伝えれば、エピソードの達人になれます（話が面白いことは、実はモテるための秘訣でもあります）。

ＶＲ（仮想現実）という技術がありますが、これからの小説も五感で入り込めるものになっていかなければ生き残りは厳しい。今後の作品では、ＶＲ的な手法を自分なりに突き詰めようと考えています。

また、今日本に一番足りないのは「エロス」。このまま少子化が進むと、100 年後の日本の人口は 4000 万人。恋愛っていいな、夫婦って楽しいだろうなと若者に思わせてあげることは、大人達の大切な仕事だと思います。

Q. 小説家としての腕力を上げるには？

A. 長編を書くよりも、短編で１つの小説を終わらせること。できればそれを人に見てもらう。それを繰り返すとうまくなります。

ＳＮＳも似ています。ツイッターは 140 字ですが、200 字書いてから削って 140 字にした方が断然密度が濃い。きちんと書くとフォロワーがつきますよ。

Q. 短編小説ですごいと思う作品は？
A. 山本周五郎の『大炊介始末』『その木戸を通って』。ぜひ本屋さんで立ち読みしてみて、面白かったら買って下さい。95%の人は買うでしょう。海外ならヘミングウェイ。筋肉質で、事実をきちんと書く。あとはボルヘス。小説はいい雰囲気とプロットさえあればいい、というのは参考になりました。

Q. 最近活躍している作家で、特に注目しているのは？
A. すごいと思う人はいますが、うまいと思う人はいないですね。女性作家の作品を読むことが多いかな。角田光代さん、小池真理子さん、辻村深月さんなど。

最近の小説は、感動を押し付ける装置になってしまっている。また、日本の男性作家は恋愛小説が苦手なようなので、自分がやっていこうと思っています。

Q. 石田さんの考える、本の持つ力とは？
A.様々な情報に流されて右往左往する時代に、拠りどころを持つには本が一番です。なぜなら、本は情報ではないから。本は、ある人が「こういう風に生きている」ということを丸々伝えてくれる。人を内側から変える力を持っている。

信じてきた価値観が崩れていく時代が、これからやってきます。そんな中でも「あの本の主人公ならこんなことはしない」といったことを思えば、苦しいときに踏ん張る力になります。

それと、本は純粋に楽しいです。

Q. 漫画や映画と比べて、小説は受け手の想像力が強く働きます。その点については？
A. 読み手の感覚は重要です。同じ単語でも、作家によって質感が全く違う。それが感じられるような小説こそ優れていると思います。自分だけの言葉が使えたと思ったときは、書いていてすごく楽しかったです。

小説では、映画のように景色を全て映すことはできません。目に入るものの中から、自分にとって新鮮なものを２、３個選び、手短かに描写する。それが読者の想像力を刺激する方法です。

Q. 日本人の活字離れについては？
A. 日本人の優秀さは、識字率の高さとコミュニケーション能力によるもの。本を読む力が落ちれば、次世代の労働力は厳しくなると思います。

読むことで生活のクオリティーは上がります。身の回りにネットばかり見ている人がいたら、ぜひ改宗させてあげて下さい。こちらには楽しいことが待っていますよ。

穏やかな語り口と、ときおり見せるユーモアがとても素敵な石田さん。客席からの質疑応答まで会場は大いに盛り上がり、惜しまれながらも閉会となりました。

石田さん、司会をしてくださった今井さん、素敵なお話をありがとうございました。